
ある昼下がりの午後に

issei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある昼下がりの午後

【Nコード】

N1724V

【作者名】

isssei

【あらすじ】

コーヒ一杯、君がなにかを見つけたらもう一杯

なあに、時間ならたっぷりあるさ。

なにせ君はそれに気がついたら

(前書き)

気が付いた時になくしていたら
探しに行けばいいじゃないか。

そこにあるのが、本当に探していたものかわからない、

でも、君にとって大切な物のなのだろう。

「ある午後の昼下がり」

仕方のないことさ、いつの間にか当たり前のようにそう感じるようになった志木は液晶画面に表示された四文字を一瞥すると、空席のままの隣の席に鞆を置いた。正午を廻ったばかりの原宿駅前のこのカフェは街の喧騒を遮るように物静かなジャズが流れている。

「コーヒーをもう一杯もらえますか」

普段は陽気な初老のマスターは今日の志木を見て、なにかを感じ取ったのか無言のまま頷くと炒り立ての焦げ茶色の豆に熱湯を投じた。立地条件が最高なはずのこの店は、いつ訪れても六席しかないテーブルが埋まっている姿を見たことがなかった。それが店先に出されているメニュー表の値段のせいなのか、それとも入口の分かり難さが原因なのか、志木には分からなかったが、出されるコーヒーの味だけはその道に詳しくない人間でも思わず唸るだけの品格があった。カウンターに、真白いカップが置かれると、鼻先に立ち昇る薫りが漂う。大きく息を吸いこむ。

「ちよつとだけ、渋めにしたよ」

僅かに口角を上げたマスターはソーサーから手を離した。かつては日本陸軍で満州を経験したらしいその手は、やはりというべきか、皺がなく、それでいて逞しい。カップを持ち上げ、一口啜る。成程、確かにいつもより豆が荒く挽かれているのか、口内に残る苦味が強い。

「今日は妻の命日なんだよ」

カップをカウンターに戻した志木に、マスターは続ける。気がつけば先ほどまでいた含みの客の姿は無かった。話の先を促すように、志木はマスターを見つめる。清潔そうな布巾を手にしたマスターはカップを拭きながら続けた。

「不思議なものさ、一緒に暮らしていたころはあいつのご機嫌を取るのが面倒くさくてな、趣味でもない花束を……っていつても今みにいに花屋なんかなかったから道に咲いているタンポポやユリを集めて届けたもんさ」

コーヒーの湯気が二人の間で揺れる。

「この店はあるの夢だった、いつか二人で小さくてもいい、店を持ってきてくれたお客さんと楽しく過ごす、そんな話をしていたもんさ、だけど時代はそんな小さな夢も許してくれなかった、俺は戦場で夢とは程遠い事を繰り返していた」

そこで言葉を区切ったマスターは、ポケットから皺苦茶の写真を取り出した。

「どうだ、美人だろう」

それは白黒の写真だった。髪の毛の結び目に差された簪と口元に運ばれた着物の袖、その間から覗く一重の女性の瞳はカメラのレンズの先にいる誰かを見つめているのか、半月状に微笑している。

「この人が」

そうだ、と頷いたマスターは宝物をしまう様に丁寧に写真を胸のポケットに戻した。

「カラーの写真も残っているんだが、この写真のあいつが一番好きなんだよな、この写真じゃ着物の色も分からないのに、俺の記憶の中のあいつは桜色の着物を着て、俺を見つめているんだ」

答えるべき言葉が見つからなかった志木はコーヒーを口元に運ぶ。

話を聞いている間にいつの間にか温くなったそれは、苦味を残して志木の喉を流れていく。

「あいつがいなくなってから、俺はあいつに優しくなったんだ、いや、違うな、あいつがいなくなってから、俺はやっとあいつの優しさに気がついたんだ」

店内を流れるジャズはサクスのソロに変わっている。店先のopenの看板はcloseに変わってしまったのか、客足も途絶えている。

「今日は、妻の命日だからな」

もう一度同じことを、今度は独り言のように呟いたマスターは、カウターに飾られた一輪のタンポポに目配せをした。

「俺が口を出すのは余計なことかもしれない、だけどな、やっぱり黙っているのは性に合わないんだよ」

そういったマスターは、志木の前に置かれたカップを取り上げると、それを自分で飲みほした。その仕草に呆気に取られていた志木にマスターは目を細める。

「お代はあとでいい」

その目は行くべきところに行け、と促しているようだった。だから、かもしれない。隣の席に置かれていた鞆を掴んだ志木は、自分でも驚くほどの足取りで店の木製のドアを押しあけていた。

恵比寿駅から徒歩十五分、群青色に塗装された漣マンシヨンの402号室の前で、志木は肩で息を吐いていた。いつからだったろう、周囲で起こる出来事を他人事のように、見るようになったのは。昨夜の電話が思い起こされる。限界まで伸びきったゴムのように、張り詰めた彼女の心に浴びせた志木の言葉は、まさに凶器と呼ぶに相応しい物だった。左手にまだ嵌められている指輪に目を落とす。どうして彼女がこの金属のリングを喜んだのか、考えたこともなかった。そう、考えたことすら、無かったのだ。大きく息を吸った志木は震える指先でインターホンを押す。静かなドアの向こうに、聞きなれた人工音が響いた。いつもなら、開くはずのドアが開かない。当たり前だろう、志木は落下防止用の鉄柵に体を預けると、ため息をついた。いまさらなにを変えようというのか。彼女は幾度もそのチャンスをくれていたじゃないか。ポケットから取り出した携帯電話に新着を告げる表示は無い。マスターの前で話をしていただ女の言葉が脳を過る。

「本当にこの人は記念日さえ言わなきゃ覚えていないんですよ」
そういつて笑いながら志木を見つめていた。幾つもの「なぜあの時

に」が志木の心を廻り続ける。そう、今日だって彼女との四年記念日だったのだ。それすらも忘れて、昨日の電話で志木は自分の話ばかりを繰り返していた。彼女の出していたSOSにさえ気が付けなかった。

「本当に、ごめん」

独り呟いた志木は都合のいい、最初で最後の一輪のチューリップを郵便受けに差し込んだ。どうして一輪しかないはずのチューリップが数輪に見えるのか、その訳に気がつくこともなく、携帯の液晶画面に残っていた四文字に宛てた返信を打ち始めた。

一人、カウンターに腰を下ろした志木に眉根を上げたマスターはなにかを飲み込むように、背中を向けた。客は店を出てから増えていないのか、空席しかない店内にはジャズしか流れていない。夕日が差し込むカウンターに志木は純白のヤマユリを滑らせた。

「これを奥さんに」

この人のいいマスターの店に来るのも今日が最後だろう、再びこの店を訪れるには思い出が多過ぎる。

「ありがとうよ」

振り向いたマスターはさつとそのヤマユリを受け取ると、タンポポの横にそれを静かに置いた。コーヒーの香りと混ざり合ったユリの芳香が店内で溶け合う。

「マスターの言うとおりでした、気がつかなきやいけなかったのは俺のほうだった」

そう呟いた志木の前にエスプレッソが置かれる。先ほどよりも濃い、芳醇な香りが小さなカップから立ち昇る。

「お代はいらない」

それだけ話したマスターはカウンター越しに腰を下ろすと、煙草を啜えた。昼間より証明が落とされた店内に、紫煙がゆらゆらと揺れる。客の目の前で煙草を吹かすマスターを初めて見たときは、彼女と二人、目を丸くしたものだ。いまではそれすら懐かしい。

「頂きます」

すぐに帰ろうと思っていた志木だったが、カップを掴むと、そつとそれを喉に通した。どうしてこんなにも苦いのだろう。潤み始めた世界に、志木は初めて涙を流していることに気が付いた。

「大切なことに気が付けたならそれをこれから先、忘れるなよ」

カウンターに置かれた灰皿にそつと煙草を押しつけたマスターは、音響機器のポリウムを絞った。耳に残っていたバラードのようなジャズが少しだけ遠ざかる。

「コーヒーの数だけドラマがある、それがこの店のコンセプトだ」英語の発音だけやたらと流暢に話すマスターは、ニヤリと笑った。それと同時に背後で開く木製のドアの音。この店の間取りはカウンターから原宿の竹下通が見えるガラス張り。ガラス張りの壁にはめ込まれた木製のドアが浮いているように見えると笑っていたのは誰だったのだろうか。志木の背後から声が聞こえる。

「あれ、closeの看板が出てたけど、お店開いてるじゃないですか」

その声と、マスターの表情に、志木の声は迷子になっていた。初老のマスターは「あれ、おかしいなあ」などと言いながら、カップに布巾を滑らせる。

「あ、そうだマスター、聞いてくださいよ、私ストーカーにあっているみたいなんです、家に帰ったら郵便受けにこのチューリップが差さっていて」

片手に持っていたカップが小刻みに震える。焦げ茶色の液面にいくつもの漣が浮かぶ。志木を意に介さないマスターは陽気な声で答える。

「そりゃ危ないな、ちょうどいい、ここに…そうだな、俺ほどいい男じゃないけど、ついさつき酸いも甘いも経験した男がいるけれど、ボディガードとして雇ってみるかいい」

声の主は志木のすぐ背後まで近付いたようで、その香水の薫りが漂う。

「どうしようかな、マスターがそういうなら少しはいい経験したのかもしれないけど」

そういった声の主は空いていた隣の席に腰を据えると、志木の双眸を覗き込んだ。

「ちゃんと、私を守ってくれるのかな」

その声に答えるように、志木は涙でぐちゃぐちゃになったまま、ほほ笑んだ。そうだ、良かったらコーヒーも空になった所なんだ、君の話しを聞かせてくれないか。

「ねえ、マスター、この人すごい顔で泣いているけどどうしたの」
からかう様に話す彼女の臉からも流れ落ちている涙が志木の視界に映り込む。君は俺にもう一度、時間をくれるのか。ジャズと絡み合ったそれはいままでに見たことは無いほどに美しい。

「おいおい、お前さんまで同じような表情だぞ」

そういったマスターは新しいコーヒーを四つカウンターに並べる。そして、沈むことのない白夜の太陽のようにほほ笑むと、志木に語りかけた。スロービートのジャズが、響く。

「どうだ、うまいだろう、うちのコーヒーは」

今日何杯目かも思い出せないコーヒーを啜った志木は、大きく頷くと、隣に腰かけた女性に向き合った。そして、「さよなら」を告げた女性の心に、ゆっくりと耳を傾けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1724v/>

ある昼下がりの午後

2011年10月6日20時43分発行